

授業時間における事故防止 初心を忘れずに

東京都多摩教育事務所 (H18. 3) 資料より

体育科における事故防止と安全指導の配慮点 その 2

③ 施設管理について

ア 施設・用具の正しい扱い方の指導

- 各運動の特性をよく理解し、使用する施設・設備、並びに器具・用具の扱い方を指導する。
- 体育活動の行われる場所に応じて、実施する種目を選ぶ。

イ 施設・用具の管理上の留意点

- 設置・購入時等における安全点検の徹底を図る。
- 日常の安全点検と管理の徹底を図る。
- 安全な「場づくり」の指導をする。(安全空間の確保)

ウ 施設・用具の日常的な管理上の留意点

- 常に保管と使用の区別を明確にし、児童・生徒が無断で使用するのこないように、使用上の注意を児童・生徒に徹底させる。
- 運動施設・用具などは、単に体育科・保健体育科担当教員ばかりでなく、校長、副校長等を含めた安全点検の組織をつくり、定期的または、必要に応じて巡回点検を実施する。
- 管理上問題がある箇所が発見された場合には、すみやかに修理、使用制限などの処置をとる。

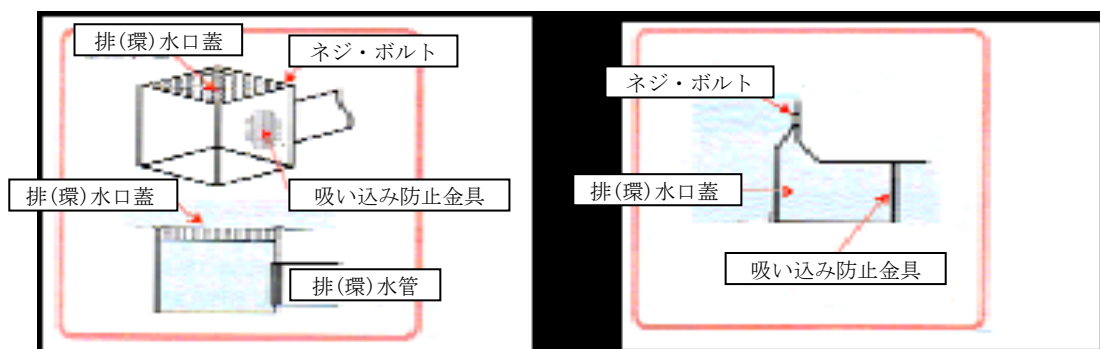
◆ 「水泳の事故防止に向けて」

プールの排水口には格子状の鉄蓋や金網、吸い込み防止器具を設置し、固定の状況を確認する際は、目視による確認だけでなく、触診や打診なども行う。

- 排水口（循環口）の安全…排水口の形態

<底型>

<側壁型>



- 安全管理のポイント

- ・ ボルト・ネジで、蓋は固定されているか。
- ・ 吸い込み防止金具は設置されているか。
- ・ 蓋（ボルト・ネジ）は、腐食していないか。
- ・ 構造上の問題はないか。
- ・ 排水口（循環口）付近での児童・生徒の活動には、十分に注意しているか。

〔参考資料〕「水泳の事故防止に向けて」（平成 13 年 3 月 東京都教育庁指導部）

平成 22 年 6 月 22 日

「対岸の火事」ではなく、「他山の石」として

物事を判断するためには、これまでの経験やその場の思いではなく、判断に足る正確で必要十分な情報を収集することと、より専門性の高い者の助言に耳を傾け、客観的に見ることが重要です。

浜名湖転覆「大雨強風注意報の中、なぜ決行」 読売新聞 19 日（土）朝刊

生徒らは 2 時過ぎから、自然体験学習の一環として、生徒 92 人と教師 5 人が青年の家の職員 3 人とともに 4 隻の手こぎボートに分乗し、ボートをこいでいた。**転覆したボートには青年の家の職員はいなかった。**転覆したボートの教師から、「風雨が強くなり、生徒がひどい船酔いで、これ以上こげない」と無線連絡があり、モーターボートでえい航して岸に向かっていている途中で転覆したという。

「浜名湖ボートクラブカナル」の柴田昌宏代表によると、**悪天候の中、大勢の人を乗せたままボートをえい航すると、予想のつかない横揺れなどが生じることがある**という。「引っ張る船に救助対象の人たちを乗せて運び、無人になった船を岸边に運んだ方が安全だった可能性がある」と話した。

県教委によると、ボート訓練は大雨などの注意報が出ていた場合、施設と学校側で協議して判断することになっている。今回は、同施設の檀野**所長らが「天候の急変はない」とみて実施を決めた**という。章南中学校には、保護者が続々と集まった。安否情報が二転三転し泣き出す人も。保護者の男性は「この雨の中で（ボート訓練を）決行するのはどうかしている」と声を荒らげた。

校長「注意報は事故後に知った」…浜名湖転覆 読売新聞 19 日（土）夕刊

水野校長は 19 日未明に記者会見し「**大雨強風注意報が出ていたことは事故後に知った**」と話した。檀野所長は「**出航後に波が高くなった。予知できなかったのはまずかった**」と語った。県警は判断が適切だったか関係者から事情を聞くなどして、業務上過失致死の疑いで捜査を進める。校長は、湖の状況などを自分で見て実施を決めたと説明した。「湖は 10～20 秒に 1 度、白波が立つような状況だった。**コースを沿岸部に変更すれば大丈夫だろうと判断した。判断が甘かった**」と述べた。

県教委によると、所長らと学校が 18 日午後 1 時半頃に協議し、出航を決めた。静岡地方気象台によると、午後 1 時の瞬間風速は 4～5 メートルだった。青年の家のマニュアルに「中学生は、最大風速 10 メートル以上でうねりが高い場合、対応を協議する」**「最終判断は所長」と明記**されている。

一方、転覆したボートに乗っていた女性教諭は県教委の聞き取りに「えい航の途中、大きな波をかぶって転覆した」と話した。所長は**早く助けてやりたいと思って気持ちが焦り、スピードが上がったかもしれない**と語った。

ボート転覆死「中に友達が…」発見まで 2 時間半 読売新聞 20 日（日）朝刊

所長が、同乗する職員の「船が倒れる」という声で振り向くと、えい航中のボートが転覆して船底を上に向け、救命胴衣を着けた生徒らが湖面に浮かんでいた。所長ら 2 人は、生徒を 1 人ずつロープでモーターボートに引き揚げ、10 人ほどを収容。「全員乗せると定員オーバーになる」と考えた所長は、操縦を職員に託して岸に戻るよう指示。自らは湖に飛び込んで転覆したボートまで泳ぎ、ボートにしがみついた生徒たちに「船底をまたいで待機するように」と指示した。

生徒から「中にまだ友達がいる」と聞いたため、所長がボートの下に潜り込むと、3 人の生徒がいた。「船内に空気だまりはあったが、波の上下が激しく確実に呼吸できる状況でなかったので、1 人ずつ 3 往復して救出した」という。生徒から「西野さんが見当たらない」と聞いたが、「潜って確認できたのは 3 人だけ。西野さんの行方をさらに確認することは体力的にもできなかった」と話した。

所長は、「私の判断が至らなかったため、深く反省している」と陳謝した。ボートでのえい航については「自分自身、初めての経験だったが、**間違いではなかった**」と述べた。

ボート事故の章南中で全校集会、校長が謝罪 読売新聞 21 日（月）夕刊

章南中学校で 21 日、事故後初めての全校集会が同校体育館で開かれ、全校生徒約 250 人が亡くなった西野花菜さん（12）に黙とうをささげた。

全校集会で水野克昭校長は「**友だちとのきずなを深める訓練とはいえ、1 年生のみなさんを厳しい自然の中に放置することになってしまったことを深くおわびしなければなりません**」と涙ながらに話し、深々と頭を下げた。